

オレンジパートナーインタビュー「心地よい空気感を活かし、参加者にとって垣根のないサードプレースを育てていきたい＝石川ゆう子さん」（令和8年7月号）

京浜急行の三崎口駅を降りると、のどかなバスターミナルの周辺には低い屋根の建物や農作地が広がる。三崎港方面に1分ほど歩くと、通りに面して明るいガラス張りのmito café（三浦市初声町三戸317-2）がある。以前は自動車会社のショールームだったが、地元産木材などを使い、出来るだけ元の構造を活かしてリニューアルしたカフェのオーナー石川ゆうさんは、子どもたちが安心して過ごせ、高齢者を含む地元市民が交流できる場所づくりをmito caféで実践してきた。「店内はゆっくり過ごしたい方向けの席と、小さな子ども連れが安心して遊べるキッズルームに分かれています。互いに気兼ねなくリラックスできる居心地の良さを実現しています」（石川さん）。

人口の約2.4人に1人が高齢者という三浦市では、地域包括支援センターが運営者となっている認知症オレンジカフェはこれまで2か所あった。「mito caféはコミュニティーカフェなので色々な世代の人が出入りしています。ここでオレンジカフェを行うことでお互いが知るきっかけとなり、連携しながら様々なことが出来れば地域が盛り上がると思い石川さんに相談しました」新たなカフェを探していた三浦市社会福祉協議会地域包括支援センターバトンの森祐貴さんは当時を振り返る。

石川さんの快諾を得て昨年9月にスタートしたオレンジカフェは現在、認知症の介護家族、市民など比較的若い世代が参加して月1回ミニ講話、手芸や意見交換を行っている。森さんと共に運営に加わる地域包括支援センターおまかせの佐藤志穂さんは「ここは一步先の細分化されたコミュニティーの場として活用できています。新しいつながりが生まれる可能性があります」と話す。それを聞いていた石川さんは「（カフェ参加者は）孫も連れて来られます」と言葉をつないだ。6月のオレンジカフェでは、三浦市で行う認知症サポーター養成講座に参加する市民へ配る、ゆるキャラ風のアクセサリーを毛糸でたくさん作った。完成後は三浦市にちなんだ名前を付けようという話題で盛り上がった。

「毎回楽しそうな企画があり、参加者の方も自然に店に入ってきます。認知症と言うと辛いとか介護が大変というイメージがありますが、前向きに楽しそうにやっているのがいいなと思います」「垣根のない場所が理想です。単に会場の提供者ではなく、参加するすべての人に自宅でも職場でもない落ち着く第3の場所『サードプレース』を一緒に育てていければ最高だなと考えています」認知症介護経験はないものの、オレンジカフェを1年近く見続けた石川さんは、認知症本人と家族、子供たち、高齢者、市民・観光客、皆がお互いに尊重し合う場所づくりを見据えてそう話した。



mito café活動風景